

信じる者の意志諸相

— リスクにかけ、真実とみこみ、これにまかせる信の態度 —

近 藤 良 樹

【キーワード】 信用・信頼・リスク・賭け・期待

1. 賭けとしての信

信じる者は、確信する。だが、信じられる情報自体は、確実ではなく、疑わしさを常に残す。確実な知になったものは、なにも信じることはないのである。信じる者は、相手の心のうちのみあって知り得ないものについて、その表現された言動が、そのころの確かな真実であると信じるが、だまそうとしている者の前では、心のうちそのものは知り得ないから、簡単にだまされることになる。信じる者は、「だまされているのかもしれない、うそなのかもしれない」と、その虚偽の可能性をころえながら、「疑うときりがない、うそのはずがない」と、受け入れているのである。それは、賭けである。

だまされる可能性は消えない。信じた結果は、さんざんな目に、ということになるかも知れない。その危険性を知りながら、これを信じて賭けるのである。信心を第一とした親鸞は、浄土の教えを信じ、法然を信じた。だが、かれは、法然の他力・易行の教えは、間違いかもしれない、自分はだまされているのかも知れないとも思った。そして、それでよいと信じて法然の他力の教えに自分を賭けた。自力の聖道門のきびしい修行によるのでないと、ひょっとしたら、救われないうのかも知れなかった。簡単きわまりない易行の念仏、口にこれを唱えるのみでよいとする教えは、危ういものであった。地獄へ落ちるだけの代物なのかも知れなかった。だが、親鸞は、信じた、賭けたのである。地獄へ落ちても良いと、師の法然の教えにひたすら賭けたのが、親鸞の「信」であった。

信じる者の賭けは、その信じられることがらについて、真とは決めえないのに、思い切って真と決めて、まよいを断ち、受け入れを決意することであり、同時に、うそ・誤りかも知れないというリスクを承知し、その信が誤っていた場合の否定的な帰結・危険を覚悟して、それを決然と引き受けることである。まよいを断ち真とみなして、知の飛躍を決意し、信へと踏み出すのである。信じられるべきものとしての所与の情報について、懷疑し知的解明の努力を重ね、真実であろうとの推定を導くのであるが、信じられるものは、真実であるとは決して断定できない。真と知りえないから信じるのである。もはや知にはなすすべがない。ここからは、もう飛躍しかない。あとは、その情報をまるまる受け入れていくという信の決意を固めるのみである。真実というこ

との保証はないのだが、諸事情の総合的判定において、これを真実として受け入れるという思い切った決断をするのである。この信の決断・かけは、なによりも、その信じるべきものがうそ・誤りであった場合のリスクの引き受けの覚悟をすることである。

ストムプカ『信頼—社会学的理論』(Piotr Sztompka; “Trust—A Sociological Theory”. 1999.) は、信(頼)について、その根本規定を「かけ」と捉えて、次のように「最普遍の規定」¹をいう。「信(trust)は、他者の未来の不確かな行為への賭け(bet)である」²と。「かけ」こそが信の核心・本質になるというのである。確かに、親鸞にしても、「かける」ことなくしては、その信は、成立しなかったことであろう。

『イソップ』の羊飼いの少年の話の場合、少年の度重なる「狼が来た」といううそに、村人は、またかと思ったにちがいないが、かけつけたかぎりでは、かれらは、まよいをふりきり信じて賭けたのである。だまされる可能性、その危険性を十分承知し覚悟をきめ、賭けて、これを受け入れたのである。そして、リスクは現実となり、だまされた。無駄足をふまされることとなった。村びとがかけつけることをやめたのは、信じることをやめたときである。かれをうそつきであると考え、そのことばを拒否し、「こんどは、ひょっとして本当かも」と賭けるのをやめたときのことである。そして、この話は、さらに、信じることをやめるところにも、リスクがあり、それも賭けであることを物語っている。それが真実であった場合、おろかしい結果をまねく。本当に狼がやってきたのに、村人は、その助けをもとめる声をうそと見なしてこれを否定して駆けつけなかった。信じない決断も、賭けであった。

信は、そして実は不信も、賭けである。無知・不可知にとどまるものの前では、真実の可能性とともに、うそ・誤りの可能性も残されている。真相を知りえないものの前では、疑う知性は真偽いずれとも決めかねる状況になる。狐疑逡巡するのみである。これから抜け出すための英断を信は下す。これは、極端をいえば、いちかばちかの「かけ」である。冒険である。真実ではないかもしれないものを、真実とみなして、信じうけいれる決断をしリスクを覚悟して賭けるのである。逆に、真実かもしれないが、おそらく誤り・うそであろうと不信を選択するのも、かけである。真実である可能性を残しているからである。

この信にかけるリスクは、真か偽かの、そして、それに従ってプランをたてる等のことから生じるリスクであって、対象そのものに内在しているリスク(自然災害などの危険)とは、区別されねばならない。自然災害発生危険(リスク)があるという情報が真実で、この情報への信のリスクが避けられるということは、自然災害のリスクが現実化することに外ならない。「この二三日中に関東地方に大地震がある」という予報を信じる場合、予報がはずれるというリスクにかけることとなる。この信のリスクの具体的な中味は、無駄足かも知れないが、非常食等の用意をすとか、大阪方面に避難するというようなものになり、そのようなリスクが現実のものとなすことは、信じたようにはならず地震が起らず、従って、その被害がなくすむのだから、幸い

なこととなる。信じていた通りに、地震が起こるならば、無駄足などのリスクは避けられたことになるが、それは、地震という自然のリスク（危険）が現実化して大変な災難の生起することであり不幸なこととなる。それでも、信じた者は、その不幸を軽減するための準備ができているから、信じてよかったのである。信じたメリットはあったということになる。

信の前には、肝心なことへの無知・不可知がある。信じるべき情報・言動は、真偽不明なのである。真にかけても、偽にかけても、ときにその反対が結果することがあり、信でも不信でもリスクにかけることになるのである。そういう信のまえでは、ひとはジレンマに陥ることになる。N. ハルトマン『倫理学』（Nicolai Hartmann; “Ethik”. 1926.）は、信は、本来、知りえないところに成立し、「盲目の信blinder Glaube」³が本物の信だといひ、従って、信は「リスク」⁴を持ち、「冒険」「かけEinsatz」となり、「勇気」⁵の要るものであることを指摘する。そして、そういう危険にかける勇気なくしては成立たない「盲目の信は、…人と人とのより深いあらゆる心情的関わりの本物であることの真の基準になる」⁶という。リスクにかけることで信へと飛躍し、ひとは、深い交わりを実現できるのであり、逆に、真の交わりは、盲目の、リスクのある信にかけることを可能とするのである。

2. 信におけるリスクのあり方

信じる者は、その信じられることがらを真実として受け入れているのだが、これを真実と見知っているのではない。真実ではないというリスクが信には残っており、当人は、これに賭けているのであり、「そうではなかったときには」という想定もされての受容になる。「信じたばかりに、とんでもないことになった」ということは、信じる時点であらかじめ想定されている。信じたその情報は、実は虚偽であった、だまされたということと、それから帰結するものをできるかぎり描き挙げて、そうなったときのこともふまえて、信じるのである。

信じさせようとするものは、あるいは、だまそうとするものは、このとき、危険・マイナスの可能性については、できるだけ、ふれないようにする。あるいは、それを隠そうとする。こういう場合は特に、信じる者は、相手の言い分をうのみにするのではなく、自身において、信じたようにならなかったときのことを、そのリスクをしっかりと描き出すのでなくてはならない。真実だと信じるのだが、どこまでも真か偽かは確定していないのであり、肝心の対象は直接的には知ることができていないのであって、それが虚偽であった場合のことを、そのリスクを描いて、これを引き受け、これに耐える覚悟をして、信じるのである。

さらには、信じて、その通りになったという場合をふくめて、実は、信には、別のリスクがある。信じられる対象は、本来的に不可知・無知にとどまるものなので、それをめぐっては不確定で曖昧なものにとどまることが多く、思いもしない面をもつ。思いもしない否定的なものを生じることがしばしばである。そういう本来的に知りえないことからするリスクも、存在している。

信じてだまされた場合の、嘘である場合のリスクは、あらかじめ知りうるリスクになるが、信・不信を問わず、いずれも不可知のものについて、これに賭けるのであれば、信じる内容に結びついていて予想だにできなかったものが突然現れるリスクの待っていることも覚悟する必要がある。

信じる内容が羊飼いの少年の「狼が来た」ということだとすると、第一のリスクは、それが真実ではない可能性があるという、だまされるリスクである。だが、リスクは、このあらかじめ分かっているリスクだけには終わらない。それがうそで「狼は来ていなかった」のだとしても、この否定のみでは、その中味は無規定で、そこに何が生じているのか不明にとどまる。「狼の来ていない」こと以外は不明である。「羊は無事だった」とは限らない。「ライオンが来た」のかも知れないし、「羊は消えうせている」のかもしれない。あらかじめ了解できて構えうる信の真偽のリスクを超えた、そういう予想外で思いもしなかったことになるというリスクが別に存在しているのである。あるいは、「狼が来た」のが真実で、はじめから構えていた虚偽のリスクは避けられたとしても、その真実に結びついていることについては、注目していないか、やはり不可知・無知にとどまるから、それに由来する別のリスクが存在する。これは、予想・予期のかまえがまわったはずされるというリスクになる。狼は一匹で後ろに凶暴な熊の群れがいたというような、思いもしないことが出てくる可能性がある。

ところで、リスク（危険・不確実）は、信頼（安全・精確）と対立する。信頼でき、精確で安全なものとは、リスクが低く、危険・不確実さが低いということである。信は、リスクそのものと対立的である。だが、信は、かけであり、リスクを引き受けることでもある。信とリスクは、どういう関係にあるのであろうか。ひとつは、反比例関係にあるということができる。信頼度・安全度・精確度が高いほど、リスク・危険・不精確度・不信度は低くなる。信頼度が低いものほど、リスクは高くなる。リスク度は、信頼（安全・精確）の度に応じて、これに反比例するものと見られる。

信を「かけ」と捉えた先のスツムプカは、当然ながら、「リスク」を問題にしていくが、信頼におけるリスクを、四段階にわける試みをしている。「第一段階のリスクは、われわれの信頼行為から全く独立の、未来の思わぬ出来事となる可能性である」⁷。信頼できる者かどうかは皆目不明なのだが、良い会社の人間だから彼も間違いなからうと、無根拠に期待し信じるような場合であり、それにとまなうリスクである。「第二段階のリスクは、まさしく信頼の行為に結びつけられる」⁸ものだが、具体的には信頼関係があるわけではなく、信じる者が何らかの理由でその人を信頼できると評価し期待していることからするリスクである。その期待通りにならなかったとするとそれは自身の評価があまく愚かでナイーブだったというような場合である。「第三段階のリスクは、信頼される者がわれわれの信頼の確信を周知し受け入れている場合にもっばら生じる」⁹もので、例えば、信頼関係がなりたっている友人や家族における、その濃い信を裏切られるリスクである。「第四段階のリスクは、なんらかの貴重な物を誰かの任意の世話にゆだねる

具体的なケースをもってする」¹⁰もので、つまり一番信が確かなはずの、個別的具体的に信用関係を取結んだもので、そこでのリスクである。われわれは、信とそのリスクを一様に見ているのではなく、確かにこのような違いをふまえてリスクに対処している。

このリスクの区別は、信頼の濃さ・確かさの違いをふまえた、信頼度の低いものの順に従った、区別だと言ってよいであろう。信頼度の低いものとは、不確かさ・危険・不信頼度の大きいものである。信頼度・精確度ということでは、同じ友人関係という信頼関係そのもののもともども、その相手に応じて区別することが可能であろう。信頼度の高い友もいるし、あまり信用できない友やうそつきで信頼度ゼロの友人もいる。根本的には、信が確かで、信頼性が高いものほど、安全で確かであって、リスクは、スツムプカのいうリスクの第一から第四の順に、逆比例して小さくなるはずであろう。

だが、単純に逆比例ですませられないのが、信とリスクの関係の現実でもある。他方では、信頼関係が確かになるに従って、濃密で危険度の高いことがらを信じてかけていくから、結果的にはリスクは、逆にスツムプカの第一・第二の順にだんだんと顕著になるともいえる。第一段階のリスクのある者には、自分の貴重品を預けるようなことはしないから、貴重品を失うリスクは存在しない。だが、第三段階のリスクの相手には、これを預けるから、これを失う可能性・リスクが生じることになる。不確かで信用できないものには、はじめから用心をし、リスクの高い事柄は回避して、うらぎられて困るようなことにはかけないから、結果的には、リスクも少なくなる。だが、信頼度の高いものは、裏切るリスクは小さく確かで安全なので、高い質のリスクにもかけていく。ここでは、その高い信頼が裏切られると、かけているものが重大なものなので、その危険の現実化は、重大なことを引き起こし、そのショックは大きいものとなる。信頼度・精確度・安全度の高いものほど、リスクも高いものになるのである。

信とリスクの関係は、反比例であり、かつ正比例でもあるということになる。次のようにいうといいのかもしれない。信頼度が高くなるほど（不信が低くなるほど）、高い質のリスクにかける度合いが大きくなり、同じ質のリスクについては、その信の裏切られる危険度は小さくなると。おなじことだが、信頼度が高くなるほど、同じ内容についてのリスク度は、小さくなり、したがって、高い内容をもつリスクにかける度合いが大きくなると。

3. 信じてもたらされる利益・メリット

ところで、かりにそれを信じても、リスクのみがあって、よいことはないのだとしたら、ひとは、信じることはないであろう。そんなものに賭ける者はいない。朽ちて危険な橋があって、そのさきにはなにもないとしたら、だれがこの危うい橋を渡ろうとするであろうか。橋の向こうに魅力的なものがあって、ひとは、落下のリスクを承知しつつ、橋を渡る賭けにでるのである。リスクはあるけれども、その信からもたらされる、大きな成果・利益が見込まれるとか、あらかじ

め行動を確定できる等々のメリットがもたらされるのである。

親鸞は法然にだまされているのかも知れないというリスクを自覚していた。それでもかけようというのは、他力の救済という途方もない魅力的なものが示されていたからであった。地獄が待っている可能性もあったが、それでも、親鸞はこれにかけた。どうせ自分に残された尋常な道には地獄しかないということがあった。うそであって、地獄に行くことになるとしても、それは、自分には必定のことであった。だまされてもともとだ、賭けてみよう、他力の救済があるのかもしれない、しかも、それは、自力の修行者にもかなわぬ極楽浄土への可能性であると、魅了されたのである。

『イソップ』の、羊飼いの少年にだまされる村人たちは、「うそだろう」と思い、信じることをやめようと思いつつも、信じた。だまされてのリスクを承知し、かつそれがせいぜい小さな徒労に済むことと、逆に本当だった場合に、つまり信じた場合に得られる大きな帰結、おおかみから自分たちのひつじを守れるということの選択のなかで、何回か信じてだまされるのであった。あの少年が「ここにはいっぱいいちごがあるよ」といっても、村人は、反応しなかったことであろう。それは、うそでも本当でも、なにももたらすことはなく些事であって、直接的には知ることができないがどうしても知りたいという「信」の領域外のことにとどまった。信じてえられるものが何もないのであれば、「信じるべきか否か」、うそか本当かと悩む必要はなく、「よかったね、うそつきさん」と受け流しておいたことであろう。

地震情報を信じる時、これを確信して予期しこれを見込んでいくときのメリット・利益は、こころがまえができ、被害を少なくできるというようなものになる。生活上の利益ということでは、信じているようにならず、地震がおきなかったときの方が良いのだが、信じることでの、確信して予定できることのメリットは、それなりにある。地震があるということであらかじめの準備ができるのである。

信じて賭けてそうならなかったときのリスクと、確信してまちがいないものと予定して得られるメリットとの関係は、ものによって異なる。おおきなリスクがあれば、それに見合うだけの大きなメリットがあるという単純な関係にはない。おそらくは千差万別である。信じる者からいうと、リスクは小さく、メリットは大きく、ことがらが正確に予定通りになるのがよい。しかし、それで信じられるものがきまるわけではない。いくら、リスクは小さくメリットが大きくても、それがうそにきまっていると推理されるようなものは、信じられるわけがない。あくまでも真実（と見なされたもの）が信じられるのである。ホモ・サピエンスは、真実それ自体に引かれる。「明日は、太陽がのぼりません、うそだったら、百万円あげます」といっても、ひとは信じない。お金はほしくて、うそは信じない。ひとは、知・真実にしたがって生きていく。

信じられる事柄は、信じる者には不確定で、メリット・プラスの可能性と、反対のリスクの可能性を常にもつ。そのとき、プラス・メリットにとらわれて、リスクを過小にしか見ないものは、

安易にこれを信じることになろう。欲張りは、その欲のために、プラスのえさにつられて、リスクを見ないか過小にしか考えないで、「うまい話」に、意外に簡単にだまされるようなことになる。だます方は、信じることができるようにと、信じることで予定でき獲得できるプラスの魅力を想像力たくましく吹聴していく。信じる者が自身では想像できないようなものまでを吹き込んで、魅力を拡大して見せようとする。逆に、無知・不可知の信にかならずともなうリスクは、これを見せないか、これは回避されると取りつくろったり、大したことではないと過小に評価されるようにしていく。

メリットといえば、信じることそのものが個人的にも社会的にも、大きな省力効果をもち、(間接)知の世界を飛躍的に拡大し、人間の共同・連帯を支えてくれることがあげられてよいであろう。ルーマン『信頼—社会的な複雑さの軽減のメカニズム—』(Niklas Luhmann ; “Vertrauen, ein Mechanismus der Reduktion sozialer Komplexität”.1968.)は、信が省力的で単純化でき経済的効率的である面から問題にし、その著書の題名にもいうように「社会的な複雑さの軽減」¹¹をいうが、それは確かに信の大きなメリットである。未来については、無数の可能性があり、それらすべてに対応し準備をしておくのは複雑きわまりなく大変である。信じることができれば、そのこと一つに集中できる。バスの運行を信用できれば、来ない可能性を考慮にいれて、タクシーのことを思いやったり、遅れて新幹線に間に合わないことを思い約束の変更はどうしようか等々との準備をしなくて済み、さらに別のことに取り組むことができる。

信というものの知的な営みのメリットとしては、これも生活上の効率の問題のひとつともみなせるが、信固有の働きとして、それが知として知的世界を飛躍的に拡大することをあげねばならないであろう。この世には、無数の情報があるが、信用・信頼のできる情報だけが、有効な情報となる。信じられるその情報は、われわれの世界を個人の直接知の狭さから解放して、間接知の膨大な世界を切り開いてくれるのである。われわれに与えられる情報は、間接情報としては、それが真実かどうかは、なかなか確かめることはできず、多くは、疑えば疑える。それでも、ひとは、虚偽のリスクをふまえつつも、これを信じて受け入れていく。信じることで、知は、無限にと拡大可能となるからである。直接的に知りえたもののみにとどまるのでは、知は、井の蛙にとどまる。信じることで、無数の真実がもたらされることになる。信じるのは、何より真実というメリット、その知の飛躍的拡大という魅力にひきつけられてである。

4. 確実と見込んで信じる

社会科学では、信頼・信用というような信が問題になるとき、信じることを「期待expectation, anticipation」に置き換えることがしばしばである。社会的信用は、主として契約や約束への信であれば、未来のことがらへの信であり、それは、その約束の実行への「期待」がこめられたものになり、「期待」に信の中身が集中することになるのであろう。

ただし、正確には、信からなるものは、期待であるよりは、確かな予期・見込みであり、成り行きの当然視であろう。地震の予報に対して、これを信じる場合、これを「期待」するものではない。余命半年を信じる場合も、これを「期待」するわけではない。多くの場合、その信がはずれて、何年も生き延びることをこそ、期待するものであろう。信じた者は、その結果、成り行きを、これにまちがいないと確信している。信じた内容の帰結を確かだと見込み予期していて、それを予定し当てにしてかまえるということになる。それは、期待するものにはかぎられない。やむをえない事態の展開を信じる場合、決して期待しているのではなく、避けられるのならば避けたい事柄を、しかし、そうなるのが真実にまちがいないとふまえて、その通りになると予期し見込んで、予定し準備するものである。

信を「期待」におきかえる日本の研究者が少なくない。expectationの翻訳としては、そうやって仕方ないのかもしれない。しかし、日本語の「期待」では信の一面しか捉えられないし、「地震の起こることを期待する」などという誤解を生じることになる。expectation, anticipationには、期待とともに、予期・予定などの意味がある。He expects the bus to be lateとか、anticipate the worstという。「最悪を期待する」ものではなく、最悪も予定・予期することである。「バスの遅れることを期待している」のではなく、遅れるかもしれないと見込み・予定することである。信を、expectationとすることは、正解なのだが、その翻訳を「期待」とするのがおかしいのである。

ただ、社会的な信用や信頼では、信じることのもとに、これを期待し頼りにするというような、信じたもので是非ともあってほしいという願望・要求の契機があつて、その点からは、「期待」が前面に出てくる。信じられるものは、確実度が高いから、それが約束の実現などの場合、大いに期待できる。信は、ここでは、期待に直結する。この方面では、信は、おおむね「期待」と置き換えられてもよいのであろう。すでにホッブス (Thomas Hobbes; "The Elements of Law".1650.)あたりも信 (trust) をそういう方向に捉えて、次のように言っている。「信頼 (TRUST) は、我々が良いことを期待したり望む (expect or hope for good) ところの相手への信 (belief) から生じる情念である」¹²と。

信は、しばしば「期待」に重なるが、さらに、希望や願いのこめられたものでもある。病弱な妻が夫の浮気の話を目にして「そんなことはうそです。私は、夫を信じています」というとき、この信は、もはやほとんど、真実として受けいれるということなどではない。それは、期待どころか、せつない「願い」である。「信じているようなものにどうぞあってほしい」という願いであろう。しかし、それもまた、「信じています」というのだから、信なのであろう。信一般がそうであるように、夫の外泊など、疑えば疑えることについてその懐疑を停止して、うその言い訳をまるまる受け入れているのである。さらには、懐疑の停止どころか、「知りたくない」とさえ思っていることもある。だが、その信は、知りえないからそのかわりに信じるというのではなく、

知を拒否しての信であり、「願い」である。真実としてあるのは、したがって、情報として知として受け入れるべきは、おそらくは、「願い」と反対であろうことは、承知している。真実など「知りたくない」と無知にとどまり、疑いを停止して、ひたすらに自分の「願い」にかけているのが、ここでの「信じています」ということである。

「期待」にしても「願い」にしても「信じている」と表現されることがある。狭義の、知としての信からいうと、「願い」などは欲求能力であって知的認識能力からはほど遠いのだが、これもまた「信じる」こととしていわれる。信に期待をこめて「明日までにこの仕事を仕上げてくださいることを信じている」といい、信に切ない願いをこめて、うそでも、「信じています」という。期待や願いは、信と一つになっているのである。これらの信の特徴づけは、狭義の、知としての信のうちに含めることはできないが、それらも、「信じている」というのであるから、広義には、やはり信なのであろう。

ただし、願いや期待あるいは予期・予定は、狭義の信とは、別ものであり、その違いは、ふまえられておくべきである。「信」は、認識のあり方であり、不可知・無知にとどまるものの情報について、懷疑を停止してこれを真実として受け入れる知の態度である。だが、「願い」は、客観的真実をもとめる知などではなく、本来は、自分の目的を実現したい、それにひとが従うことを求めたいという欲求能力に属するものであろう。「雨が降るのを願う」ことは、「雨が降るのを信じる」のとは違う。後者では、雨傘をもって出かけるが、前者では、日傘をもって出る。

「期待」もまた同様であり、望みや希望とともに、期待する本人たちが目的とするその方向への展開を、客観的真実の世界は別の方向に向かっていても、求めていくことであり、そうなることを願いながら事柄のそとから傍観して、まかせているようなあり方である。期待は、自分たちの欲求・目的の実現を待ち望む主観的な態度になり、信の、真実として受け入れる態度、つまり認識・知のありかたとは異なる。

宝くじを買うひとを例にして言うと、一枚かっても一億円の当りをひとは「願う」ことができる。だが、当たることを「信じる」ひとはいない。一万枚ほどまとめ買いをして、これを「期待する」。だが、やはり「信じる」ことはない。「願い」や「期待」は、客観的真実には目もくれず、主観の目的にひたすらで、現実と乖離することをいとわない。目の前には失望や落胆が見えているのに、これすら無視して、我意を押し通す強情者である。だが、これらを排した純粋な信は、真実を求める知の一形態として、あくまでも、客観的であり冷静である。馬券やトトカルチョのように予め当りが決められるものならいざ知らず（これらは、当事者が不正に決めているか、真にフェアなら、強いものが勝つと決まっている）、宝くじは、全面的な偶然にゆだねられており、知の参与する余地はなく、知としての信は、自分の出番はないと謙虚である。

「予期」は、予想と同じように、事柄の客観的な展開がそうなるであろうと、あらかじめ推定することで、願いや期待とちがひ、自分たちの目的に反した方向に行くことも、そのままに認め

た、知的理解の態度となるものであろう。ただし、それは、即「信」とはならない。その予期されるものは、想定されるにとどまり、真実として信じられるわけではない。おそらく、そうなるのではないかという客観的な可能性を、可能性としてふまえるもので、信のように「まちがいない」と真実として受け入れるものではない、確信するものではない。想像するにとどまる。したがって、予期する場合、信とちがひ、複数の可能性を想定することがある。「予期予感」ということでは、知的な予めの推定というよりは、感じるものとしてあいまいなかたちにとどまっていることも多い。

「予定」するとは、予め定めるとは、予期されるものにしたがって、未来の目的や行動のありかたを現在の時点から決定しておくことであり、自己の未来のあり方を予め前もって設定しておくだけのことである。間違いのない真実として受け入れ確実とみなす信の態度ではない。この予定は、予期とちがひ、客観的な展開のことは必ずしも考慮しない。予定は、事柄と当人の変化に応じてしばしば変更される。同類の「見込み」は、予定よりは、客観の展開を考慮したものになるうか。「午後は雨になる」には、「予定です」よりは「見込みです」の方が客観的でふさわしく、「昼食はカレーになる」「予定です」は主体的だが、「見込みです」は傍観者的になろう。

5. 信における必然性様相—真実と確信して受け入れる

信は、疑問の残るものを信じるのだから、確かなものではない。だが、信は、確かに、「確かと思う」のである。「そうだろう」と見込んだり予想するものではない。「間違いない」「そうだと確信するのである。信じる者は、消極的に、単に懐疑を停止して、「おそらく本当なのだろう」と想定して受け入れているのではなく、もっと積極的であって、確かさをもって真実であると捉え、必然的なものとして受け入れているのである。

信じられる対象は、真実とは確定できず、本当のところは、その可能性が大というにとどまるから、結果的には、その可能性が否定され、騙されていた、まちがっていたということがしばしば出てくる。「そうだろう」と推量し可能性にとどまると自覚していたものは、「そうではなかった」となっても、否定的な可能性も視野にいれていて、結果については、驚くことはない。だが、信じる場合、本人は、「それに間違いはない」と確信する。客観的には、そうではないことも残っているのに、そうは捉えず、「そうだと信じこんでいるので、「そうでない」結果がでてくると、驚くこととなる。その落差は大きい。なぜ、信では、本当は可能性にとどまるものを、必然性にと主観的に過剰に評価していきこうとするのであろうか。

疑えるもの・可能性にとどまるものを必然性にすりかえて「信じる」のは、ひとつには実践的要請ということがある。ものごとは確定していなくては、計画も実行も先にはすすませられない。可能性にとどまるのではなく、いずれにか決定していなくては、進むことのできない場合がしばしばある。狐疑逡巡していたのでは、行動にはでられない。岐路にさしかかって、どちらの道も

可能というのでは、さきに進めない。このとき思い切って断定して、いずれかにかかる必要性がでてくる。「この道にかけよう、これに決めた！」と、迷いを断ち確信して進むのである。

さらに、ひとの言動を信じるという場合、このひとに対する評価となることがかかわる。その言動を疑えるもの、疑わしいものと捉えていたのでは、その相手からいうと、「自分の主張は、そのままには受け入れられていない、うその可能性がある」と留保されている」ということであるから、不愉快である。よい関係を維持するには、できるだけ、相手を肯定的に受け入れる必要があって、「疑ってはいない、確かだ必然的だと思っている」と、「信じている」ことの表明が求められる。

信において、「確かだ」「必然だ」と思うのは、だが、何といても、懷疑停止によるものであろう。信じられるものは真実ではなく、真実の可能性が高いということとどまり、可能的だとは、そうでないかもしれないということであり、疑える、疑問が残るということである。信は、しかし、真実をかけ、この疑問を思い切って停止・破棄するところに成立する。おそらく、この疑問の払拭が、必然性という過剰評価の主要因になるのであろう。「決して疑ってなどいません、しっかり信じています」というように、信じるとは、疑いを打ち消しているということである。疑いを破棄して、「なにひとつ疑わしいものはない、まちがない、必然性をもったものだ」と単純明快にしているのであろう。

ところで、こどもは、疑うことを知らず、与えられた情報は、素直に受け入れ、単純明快に絶対的なものと確信する。われわれは、信じるという場合には、疑いかつその疑いを停止するという過程をへて、これをうけいれる。結果的には、こどもと同じく、信じる場面では、疑いを廃棄しているので、すっきりとしている。このすっきり感が、信における確かさのよってたつところとなるのではないか。こどもにおける無心の受容の単純明快さは、懷疑することがない、疑いが無いというところにある。大人でも、信じるところでは、そうなっていて、懷疑が消失し受け入れは留保なく全面的であって、すっきりとしているのである。

われわれは、所与の情報 (M) を信じるという場合、その背後の、その指し示すものもの (O) とそれ (M) が一致しているかどうかと疑う。M即Oとする幼児とちがい、Mとそれの背後のその指し示すものとしてのOを区別する。Mは、まちがっていて、Oをちゃんと指し示していないのではないかと、Mは、うそをいって、もとのOと一致していないのではないかと、MとOを別にみなして、うそや誤りの可能性を想定する。つまりは、懷疑することになる。信じるのは、その懷疑をふまえMとOを区別したうえで、MはOに一致している、うそ・誤りではなく、真実であると、みなすのである。懷疑は、不要であったと廃棄しているのである。疑いのすきまがMとOのあいだからは、なくなっていて、幼児のようにM即Oとなって、確かさが感じられることになるのであろう。

われわれは、空間の右と左について、まちがうことなく確かさをもって、これを指し示すこと

ができる。左右は、自明である、確かである。時間にしても、その存在と運行には、自明さ、確かさを感じている。だが、自明な時間や左右は、これを反省し、これを定義でもしようということになると、たちまちに、自明さ・確かさを失い、あいまいで捉えどころのないものにと変容していく。本当は、自明でも確かなものでもなかったのである。それを自明で確かなものと感じていたのは、日頃、懐疑・疑いをさしはさむことがなかったからにすぎない。時間も左右も、これを問いただしても、一向にことからは明確なものにはならず、らちがあかないので、日常世界では問うことのない大前提にして、疑うことは断念しているのである。疑いようがなければ、(主観的には) 確かなのである。

本当は確かではないはずの信にいただく確かさも、こういう懐疑の廃棄あるいは停止が支えとなっているのであろう。確かであるとは、疑いのいれようがないということである。信では、いったんは懐疑をふまえるのだが、それを明確に停止し破棄して、所与の情報を真実とみなしてまるまる受け入れることになる。懐疑されるものがなければ、それは、主観的には自明で確実なのである。

6. まかせ・ゆだねる信

信じるとは、信じられる言動について、疑うことを停止して、これをそのままに、まるまる受け入れることであり、かりにだまされたとしても、それでよいと、賭けるものである。それは、リスクを覚悟し、その信ずるものとおのれを「まかせ」、これに「ゆだねる」ということでもあろう。その結果を見込み、予期・予定してリスクに賭けることは、能動的であるが、これを真実として受け入れること、まかせ、たよることは、信の受動的な態度である。信じるものに賭けて任せるのだが、「賭ける」のは、「危険に賭ける」のであり、リスクを承知して、その否定的なものにも耐える決意をすることである。メリットに惹かれつつ可能性としてのリスク・デメリットの引き受けの決断になる。緊張し身構えるのである。だが、「任せる」のは、「安心してまかせる」のであり、確かな真実にまかせ、ゆだねるのである。緊張を解き、身構えをやめ、自己放棄して、その信じるべき肯定的なものに寄りかかり、たより、そのなりゆきに安心してまかせきるといふことであらう。

「よし、信じよう、あとは、まかせる」「とても信じられない、ゆだねることはできない」等という。ここで「信じる」とは、直接的には、疑いの必要がないという懐疑停止の意志表明であり、受容である。そして、信じるということに、「まかせる」「ゆだねる」ということが連続して語られている。信じる者の意志は、単に懐疑の停止と受容をいうのみではなく、これに賭け、委ねているのである。「おれは、信じている、賭けた、さあ、すきなようにするがよい」と、信じる相手に賭け、そして任せているのである。

まかせ、ゆだねるのは、多く、未来のことがらについてである。信じるのは、さしあたりは、

現に表明されている言動について、これを疑いようがなく確かであると評価し受け入れるということである。任せ、委ねるのは、この信じられる現在のあり方の延長として、成立する。信じられる者のなすこれからのことについて、これをひきつづいて信じていこうとするときに、まかすということになる。「信じる、このさきは、任せよう、信じつづけよう」ということである。

信じるとは、懷疑を停止して、全面受容することであるが、受け入れるものについて、あれこれ詮索することなく、相手の提示するものをそのままに、受け入れるのであり、まかせるのである。真か偽かとあれこれと迷い、戸惑い、悩みつづけることからの解放であり、その点で安らぐことができる。だましたりうそをついているのではないと信じるのであり、警戒したり用心することが、そういう緊張が不要だということでもある。あるいは、相手の意志しだいでは、どう展開するか分からないことがあるのだが、信じられる内容とかそれからもたらされる事柄について、とにかく、すべてをまかせ、これをその信じられるもの自体にゆだねるのである。信じるころには、一般的に「まかせる」「ゆだねる」という契機があるといつてよいであろう。

宗教的な信・信仰では、この「ゆだね、まかす」契機が重要なものになる。神仏を信じる者は、これに自分を「まかせる」ということになる。一遍は、「信といふはまかすとよむなり。…法にまかすべきなり。…天運にまかすべきなり。」¹³という。まかせることがないとしたら、信じ切っていないということになろう。また、まかせることがなくては、宗教的な安らぎも十分にはえられないことになろう。任せることにおいて、エゴをすてて、その神仏の世界に一体化して、心安らかなものを得ることができるのである。

親鸞にしても、はじめは疑問をいだいた。きびしい命がけの自力の修行が一般的なやり方のなかで、口唱の念仏のみでよいとする易行他力の教えは、きわめてあやしく危ういものに映ったことであろう。しかし、親鸞は、それを乗り越えて賭けそして任せきった。このとき、信じ切る態度は、とにかく、懷疑停止を貫徹し、地獄のリスクをもものともせず、阿弥陀如来に、あるいは法然の教えにすべてをゆだねる、まかせるということであつたらう。じたばたしてもどうしようもないのであり、自力のころをすてて、法然のこたばを信じ切って、これにまかせたのである。信じる場面で、なお用心のころを残し、なにかあつたら躊躇するとしたら、それは、疑いを残していたということであり、信じ切っていなかったということになろう。信じ切るには、自己を捨てて、まかせてしまうことが求められるのである。

知的にいくら詮索してみても埒のあかないのが、信じるという場面での基本である。とすれば、信じる者は、その信じるべき情報・言動にまかせる以外ないのである。約束であれば、それがその通りに実行されるであろうことを確かめて、ひたすら受け入れる以外ない。約束した者確かと思えば、これに、ゆだね、まかせ、あるいは、その者に頼るのみである。懷疑していくのは、ホモ・サピエンスの本来のありかたである。どこまでも、知的な存在であるのがひとである。だが、自分の知で直接捉えられるところはごく限られている。未来のこと、ひとの心の中のこと

等は、直接には知ることができない。こういうところでは、知性は、信じるべき言動をうけいれるか否か英断を下し、あとは、自己を無化し自己放棄して、その与えられている情報に賭け、まかせ委ねる以外ないのである。

「まかせる信」とともに宗教的信では、「たまわる信」というようなことをいう。なにより信を大切にした親鸞では、「如來よりたまはりたる信心」¹⁴「佛のかたよりたまはる信心」¹⁵をいう。信は、自己が懷疑停止を意志し、リスクに賭ける決断をするもので、自己の意志がつよく貫かれているのだが、それを超えて、この信そのものが根源的には、与えられているのだという。宗教人にとっては、すべては、神のもと、神の意志によることで、あるいは、すべては、仏のたなごころのもとでのことで、その信仰・信心も神仏のものということになるのであろう。だが、それは、かならずしも信仰に限られた事柄ではなく、信一般のうちでも、そういう「与えられた信」は、考えられる。信じる者をして、リスクへのためらいや懷疑を廃棄させ、これを魅了しその身構えを麻痺させるとしたら、この魅了し麻痺させるものは、信じる者自身に起因するのではなく、信じさせるものがそうさせているのである。「たまわりたる信」という信の規定は、信一般のうちでも言うことなのであろう。

7. 「うそを信じる」一徳としての信

信は、根本において、知の営みである。しかし、他方では徳目として、つまり倫理的な一定の状況に応じて類型化された当為として、意志の営みのもとにあげられる。徳としての信は、一つには、知が懷疑するのみで、出口を失い堂堂巡りをする以外ない場面において、懷疑停止の決断をすることにいわれる。知的なものへの意志の参与である。知を思い切って飛躍させるのが、信じるという決断である。リスクを引き受けて、賭けて、所与の情報を真実として受け入れる、勇氣ある決断である。虚偽の可能性も想定され、知的には確定できず躊躇する以外ないところで、知的な根拠をふまえつつ、知を越えて一步を踏み出すのである。

信は、人知を真実とみなして受け入れる決断をするのであり、それは、ひとと知の共同体をつくる。信は、連帯・共同をささえる徳となる。ひとを疑うとは、このひとを信用ならないと見なすことで、警戒をとけないということであり、不信感のあるところでは、ひとはばらばらになってしまう。信用・信頼がなれば、警戒を解き、安心して一緒に生活できる。信の有無は、人間関係の存立に決定的であり、この信頼・信用は、緊密な社会関係に不可欠の徳になる。

だが、信じることのうちには、悪徳・非徳の信もある。迷信・盲信・軽信等と否定的に表現される信は、そういうものになる。信は、無知・不可知にとどまる面をもつが、この面がさらに、反知に変質することがある。知りえないのではなく、知りうるのだが、自分の都合が悪いので、知ることをさげ、知的な営みを拒否しようというのである。迷信は、知的に理性的にふるまえば、受け入れることはできないはずのものについて、自身の不安解消や欲望のために血迷い、呪術や

宗教の独断をたてにとり、はじめから知を拒否し懐疑停止の信をとろうと、信を悪用するのである。盲信や軽信もまた、そうである。人知を働かせれば、信じ受け入れることのできないものを、怠惰にも、知的な労苦を避けて、都合のよい情報をもちつづけるためにと、信にしがみつのである。ホモ・サピエンスとしての使命を放棄した怠惰な信である。信用・信頼も、それがちゃんとした根拠・裏づけなしでそうしている場合は、危うい。軽信・盲信に墮すことがある。単に信頼すればよいというものではない。根拠をもって、あるいは、危険を判断したうえでの、つまりは、深慮をもち英知を働かせてのものでなくては、徳としての信にはならないというべきである。

ひとが懐疑的批判的になることは、大切なことである。それは、虚偽を排除しつつ、確かな真実を受け入れることであろうから、ホモ・サピエンスとしては、ほめられるべきことである。信は、しっかりと懐疑をふまえたうえで、これを真実と確信して受け入れるのでなくてはならない。だが、懐疑可能どころか虚偽と承知されているものであっても、信じて受け入れることの必要となる場合がある。そういう危険な信が、危険であるからこそ、高い稀な徳となることがある。

ひとは、自分への高い評価を、賞賛のことばをもって知るが、それが単なるお世辞でしかないこともしばしばである。しかし、「あなたを信じます」というかたちでの評価は、単なるお世辞にとどまるものではない。信じるには、それにとまなうリスクを引き受けねばならない。だまされる可能性が常に残っているのに、それを覚悟して、かけるということである。「信じる」という評価は、そういう裏打ちがされている真の評価になる。信用・信頼されることは、ひとにとって、誇らしいことであり、これは、社会生活を営む者にとり、大きな贈与である。この信の贈与には、誠実のお返しをと誰もが思わずにはおれないことであろう。あるいは、その信頼の高い評価には、この評価のとおりだと実証するために、はじめはうそをつくつもりであったとしてもこれを改め、信じられているように、信頼を損なわないようにと誠実にふるまっていく必要を感じるようになる。

信じることは、信じられる者をそういう方向にと変えていく力をもっている。非行少年をして立ち直させるのに決定的だったのが、「自分のような者の話を信じてくれた」先生のいることだったというようなことがある。N.ハルトマンは、「信じる者から発する道徳的力は、卓越した教育的力だ」¹⁶といい、信は、信じられた者をして、信じるに値するものに変えていくこと、贈られた信頼に値するようになろうと「道徳的誇り」¹⁷をもつ者へと教育していくことを主張している。うそだと見なされているものをひとは信じない。真実と思われるものを信じるのが普通である。だが、ときに、信は、「うそ」を信じ、これにかけ、これに身をゆだねる。信じることに何より大切な価値があるという場面では、ひとは、うそをも信じていく。そして、こういう信は、やがてその「うそ」を「本当」に変えていく力をもつのである。

註

- 1 Piotr Sztompka; “Trust - A Sociological Theory” . Cambridge University Press. 1999. p.25.
- 2 Piotr Sztompka; “Trust - A Sociological Theory”. p.25,69.
- 3 Nicolai Hartmann; „Ethik”. 1962. S.470. (Kap.52. b.)
- 4 Nicolai Hartmann; „Ethik”. 1962. S.470. (Kap.52. b.)
- 5 Nicolai Hartmann; „Ethik”. 1962. S.469. (Kap.52. a.)
- 6 Nicolai Hartmann; „Ethik”. 1962. S.471. (Kap.52. b.)
- 7 Piotr Sztompka; “Trust - A Sociological Theory”. p.31.
- 8 Piotr Sztompka; “Trust - A Sociological Theory”. p.31.
- 9 Piotr Sztompka; “Trust - A Sociological Theory”. p.32.
- 10 Piotr Sztompka; “Trust - A Sociological Theory”. p.32.
- 11 Niklas Luhmann ; “Vertrauen,ein Mechanismus der Reduktion sozialer Komplexitaet”.1968.
- 12 Thomas Hobbes ; “The Elements of Law”. 1650. Pt. 1. Ch. 9. Sec. 9.
- 13 『一遍上人語録』 卷下76
- 14 『歎異鈔』 後序
- 15 『御傳鈔』（『本願寺聖人親鸞傳繪上』） 第七段
- 16 Nicolai Hartmann; „Ethik”. 1962. S.472. (Kap.52. c.)
- 17 Nicolai Hartmann; „Ethik”. 1962. S.472. (Kap.52. c.)

The Phases of Will in Believer and Truster

— They Bet against Risk, Have Faith and Entrust to it —

Yoshiki KONDO

In belief or trust we have a believable information and a hidden essential matter. Fundamentally the believed hidden matter cannot be known directly by believer, only is indicated to him with that information. By some reasons we consider and accept the information as truth and become to believe it. Because we cannot know directly the truth of that information, we are sometimes deceived by it.

While believer and truster have no means than the given information which cannot be certified as truth by them, they must bet on this risky one. When in belief or trust we have only a risk and no merit, we may not bet on it. There must be also some merit that results from believing matter.

Although this “bet” may be one definition of belief or trust, many researchers usually define it as expectation or anticipation. These words “expectation” and “anticipation” in English include as well the negative result of expected matter, i.e. the expectation of bad result or the anticipation of wrong fact. But the translated Japanese expectation “KITAI” does not include such negative result, only means “hope for good”. Similarly we sometimes paraphrase the belief as “wish”. Then the ability of belief or trust is for the recognition, but Japanese expectation “KITAI”, hope and wish are the ability or function of desire, not of recognition, so exactly are not the belief in a narrow sense.

In addition generally truster entrusts to trustee or trustworthy matter. The entrust is also the cardinal moment of trust or belief. While betting is the willful negative action against a risk, this entrust is the positive non-action to leave us in the trusty at rest.